

ずいそう

『真田丸大河ドラマ館』の一年を振り返って！

唐 澤 信 幸



2016年度のNHK大河ドラマ『真田丸』は、全国の幸村ファンや多くの人達に数々の感動と話題を残し2016年12月18日（日）50回目の最終編で幕を閉じました。

大河ドラマの第1回目は、1963年（昭和38年）に放映された『花の生涯』でスタートし、今回の『真田丸』でちょうど55回目を数えます。その間、日曜のゴールデンタイムに家族そろってテレビを見ていた時代は、大河ドラマの視聴率もかなり高かったものの、ここ10数年近くは低視聴率化の傾向にありました。

しかしながら幸いにも、今回の大河ドラマ『真田丸』は低視聴率化に歯止めをかけると同時に、かつての大河ドラマの栄光を取り戻すかのように連日マスコミ誌上を賑わしました。その結果大河ドラマ館史上最高の来館者を迎える事ができ、2017年1月15日閉館日までの365日間における来館者数は1,035,208人を記録し、文字通り“日の本一の大河ドラマ館”となることができました。

大河ドラマ館は、30年程前から大河ドラマの放送に合わせて開館され、大河ドラマの時代背景を深く知ることにより、ドラマをより楽しんでもらうと共に、舞台となる地域を多くの人に知ってもらう目的等をもって開設されてきました。具体的には、実際に撮影に使用された衣装や小道具等の展示、ロケに関する資料や映像、またドラマの時代背景や人物関係図等詳しく展示解説し、大河ドラマへの興味や理解が進むような様々な工夫が施されています。

私は、今回縁あって大河ドラマ館の館長兼入場券販売センター長と言う役割をいただき、ドラマ館オープン以前から入場券の販売準備、オープン後はドラマ館の管理運営の仕事を1年半程担当させていただきました。

私の前職は観光業界での仕事であり、旅行業界及びホテル業界であわせて35年以上業務に従事してきました。

ドラマ館の仕事は初めてですが、まさにこれまでの経験が様々な場面で役立ったことも事実で、旅行関連に携わる人たちからの質問及び要望事項や下見時の対応、クレーム発生時の処理等々、これまで自分が体験

してきた事をベースにしながら、スムーズな打合せや対応ができたのではないかと密かに自負した次第です。

入場券販売センターとしての業務は2016年9月1日から始まり、ドラマ館オープンまでの4か月あまりは、首都圏や中京地区さらには東北エリアの旅行会社やバス会社等中心にセールスする一方で、地元長野県内の観光関連施設等にも積極的に営業を展開してきました。

幸いどこのエリアに出掛けた際にも“真田幸村人気”は非常に高く、チケットの事前買取りや募集ツアー企画に対しても、確かな手ごたえを得たのも事実です。

そして新年を迎えた2016年1月17日、主役の堺雅人さんを迎えてのオープニングセレモニー、当日は招待客含め2,000人を超える来館者が有りました。その後は月を追うごとに、順調すぎるくらいの経過をたどり、5月下旬には早くも来館者30万人を達成、7月末には当初の年間目標50万人をクリアー、11月中旬には、来館者がなんと90万人にも達し、まさに真田軍団の勢いを実感した思いです。

当初上田市が計画した年間来館者の目標数値は、50万人でした。その根拠としては、2009年に放映された大河ドラマ『天地人』の来館者数404,767人をベースにしたとの事で、その理由としては、ドラマの舞台の中心となった新潟県上越市は、首都圏からの距離や冬の気候、加えてドラマの時代背景が戦国時代であること等類似点が多く、その実績数に招待者等無料入場者10万人を加え50万人が算出されたとのことです。

オープン当初は、人口16万人弱の地方都市の大河ドラマ館に、本当に年間50万人ものお客様が来てくれるのか、内心大変不安でしたが、結果的にはこれまでのドラマ館が記録した事のない来館者を迎えることが出来ました。参考までに、これまでの最高来館者数は2008年に放映された『篤姫』で451日間に667,535人の来館者がありました。この数値と比較しても、今回の来館者数がいかに凄いものかがうかがい知れます。

今回のドラマ館がこれだけ大勢の来館者に恵まれたことについては、さまざまな好条件が重なった結果と言えます。まずは、基本的かつ一番重要な事とおも

ますが、大河ドラマに対しての上田市民および上田市の取り組み姿勢の『熱さ』を強く感じました。数年かけて80万人を超える署名を全国より集め、NHKに対し大河ドラマ実現に向けての嘆願書を提出。決定が決まると、推進室を設置し機動的かつ積極的に様々な準備に取り掛かり、運営期間中も熱心に全国各地にセールズ等展開し続けた行動力は、我々運営スタッフサイドからみても驚きの連続でした。

上田市は、首都圏からも近く新幹線、高速道路を利用すればまさに日帰りツアーは容易であり、また北陸新幹線及び北海道新幹線の開通も来館者のすそ野を大きく広げた一因といえます。更には地形的な利点、つまり海なし県の長野県は、周囲を8つの県に囲まれており、オープン当初より年間を通して北陸3県や新潟県・関東、中部地区からも多数のバス旅行が計画され、特に春から秋にかけては、連日のように多くの団体客が訪れた事も大きな実績をのこせた要因と言えます。

また、今回のドラマ館の建物は、旧市民会館を活用した為、従来のドラマ館に比べ館内スペースも広く、展示物等もドラマの進行に合わせ数回展示替えをするなど大変充実した内容であったと思います（従来のドラマ館は300m²～400m²位ですが、今回は650m²の広さがありました）。

一方で、脚本家の三谷さんの斬新ともいえる状況設定や、視聴者を夢中にさせるストーリー、その役をまさにイメージ通りに演じた豪華出演者、加えて十分すぎるほどのNHKのPR活動、上田市の様々な広報戦略も強力なバックアップとなりました。また連日のように、マスコミ関係者の取材・撮影が行われ、旅行雑誌・女性週刊誌・様々な業界誌等々、実に多くの媒体に広く取り上げてもらったことも人気に拍車をかけたと言えます。

また、幅広い年齢層の方々が来館しているのも大きな特色で、特に幼児連れのヤングカップルも目立ち、週末には、三世代一緒に見学する微笑ましい様子も強く印象に残っています。

また、普段から大勢の観光客が訪れている桜の時期、ゴールデンウィーク、秋の紅葉時期には、信州を旅行する観光客にドラマ館見学の団体客・個人客が加わり、ドラマ館には人波が次々と押し寄せました。結果一日に何回も入場制限を掛けながらの見学をお願いする事態も発生し、見学まで一時間近く待ってもらう事もありました。繁忙期の入館者の皆様には、ご不便をおか

けた事を大変申し訳なく思いつつも、真田丸の人気の凄さを改めて認識した次第です。

しかし、当然ながらすべての面で万全であったとは言い難く、私の立場からして辛いことも多少ありました。

一つは、駐車場の問題です。バスの駐車場からドラマ館まで少し距離がある為、足の悪い高齢者には大変つらく、ドラマ館の見学をあきらめ車中で待機するお客様も見受けられ、団体の幹事さんや添乗員さんから厳しい注文を頂きました。また、予想をはるかに超える来館者が長期間続いた為、ドラマ館のスタッフの皆さんには様々のご苦労をおかけしました。しかしながら、推進室及びスタッフの皆さんのご支援のもと大過なく運営ができ、かつ多くの来館者の皆様に喜んで帰っていただく姿を見る都度、疲れも半減する毎日でした。

最後に、私は今回の仕事を通して実に多くの事を学ぶ事が出来ました。その一つは、故郷の素晴らしさを再認識できた事です。私の出身地は上田市に隣接する東御市（とうみし）という場所ですが、ドラマ館開催期間中に、学生時代の多くの友人と親交を深め、様々な人との交流の輪が広がり、更には周辺の歴史や文化についても色々学ぶことが出来ました。

もう一つは、地方都市における観光客誘致の重要性和その対策のむずかしさについて学んだ事です。

少子高齢化と人口減少（大都市への人口集中化）が進む中、その対策は容易ではありませんが、今回の大河ドラマが一過性で終わってしまったのは寂しい限りです。

流動人口をいかに確保できるのか、行政まかせではなく地域住民との一体化した行動や、実態に合った柔軟な発想を持つと同時に隣接市町村との連携は欠かせません。自分の故郷や友人を大切にする気持ちが希薄になってきている昨今、私にとっては今回の故郷での仕事が実に多くの事を自分自身に投げかけてくれました。まさに大河ドラマが、これからの自分の人生に新たなドラマを生んでくれたという思いで一杯です。

残された人生、多少なりともこの一年半の経験を活かし、故郷の発展や地域間の交流に役立たせ、いつまでも“美しく住みやすい故郷・信濃の国”を守り続けるべく微力ながら努力して行きたいと思います。